

## 「わが神、わが神、なぜわたしを」

ウクライナでの戦争に関するドキュメンタリー映画のトークイベントで、ある俳優が次のように発言しました。「戦争は正義と正義のぶつかり合いだと感じました。どちらが正義でどちらが正義ではないと言い出すと、キリがないですよ。」「だから、正直に言うと私は正義を持っていません。それに白黒つけるのはかなり難しいと思っていて、諦めがあるから正義を持っていないと今は言えます。」

ことさらこの俳優を貶めたい訳ではありません。戦争に対する「どっちもどっち」的な見方は、日本のかなりの割合の人々、しかも、メディア関係者やオピニオンリーダー的な著名人にもあります。つまり、日本社会全体にある傾向と言えるでしょう。

では、イエスを十字架につけることは「正義」だったと言えるのでしょうか。同じ論調で言えば、「ファリサイ派には彼らの正義があり、それがイエスを十字架につけることになった」となるのでしょうか。確かに彼らはそのように信じていました。それこそが神の正義なのだと思いませんでした。何度もイエスを亡き者にしようとしたのはその「正義」が彼らを後押ししたからです。

そして、イエスが十字架につけられた時、彼らは自分たちの正義が間違っていなかったと安堵したことでしょう。十字架上でイエスが「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」と大声で叫ばれた時、彼らは思ったはず。「正義は我らにあるのだから、当然、神の助けなどあり得ないのに、どうして神を呼び求めるのだろう」と。文字通り、「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか」(マタイによる福音書 27:46)と悲痛な叫びを上げていると受け取ったのです。

しかし、彼らはイエスの本質を見誤っていました。「家を建てる者の退けた石が、隅の親石となった」(詩編 118:22)。イエスこそが救い主だったのです。

確かにイエスは「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのか。」(詩編 22:2、聖書協会共同訳)と、神に呼びかけられました。それは諦めではなく、「主を畏れる人々の前で、私は誓いを果たそう」(詩編 22:26、聖書協会共同訳)と詩人が歌うように、これからご自身が本懐を遂げることを宣言されるために、神と呼ばれたのです。全ての人々の救いのために、その命を献げることを厭われなかったのです。

それゆえ、このイエスの言葉はパウロが言うように、「十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力」(コリントの信徒への手紙一 1:18)となったのです。この意味において、イエスを十字架につけることは「正義ではなかった」と言えます。

このように、ある場面ではやはり一方を選ばなければならないというようなことが起こってくるのではないのでしょうか。例えば、戦争を例に挙げるならば、双方が自己正当化するために持ち出す「正義」に目を向けるのではなく、明らかな「不正義」を行っている方には「正義がない」と認めるような選択です。ここで言う「不正義」とは、「国連憲章で禁止されている侵略戦争であること」や、「民間人の殺傷や民間施設の破壊、拷問や虐待など非人道的行為を行っていること」などが該当します。

また、神との関係で言えば、独りよがりの正義を追い求めている時や、「隣人を自分のように愛」(マタイによる福音書 22:39)することができていないところには、やはり「正義はない」のではないのでしょうか。そして、自分が誤っていたとするならば、即座に自分を省みることが大切です(「冠は頭から落ちた。いかに災いなことか。わたしたちは罪を犯したのだ。」哀歌 5:16)。その上で、神に赦しを願い、自分たちにできることを探ることが大切です。イエスを十字架につけた人々にはそれができていなかったのではないかと。そう思います。

イエスは今、十字架上で道を切り開いてくださっています。命が守られ、平和が実現するための道を。力が足りないと思いついて、「わが神、わが神、なぜ私を」と問いたくなる私たちですが、平和と命のためにその道を歩む者でありたいと思います。

